

「牧村史陽氏旧蔵写真」の研究とデジタルアーカイブ化

著者	内田 吉哉
雑誌名	阡陵：関西大学博物館彙報
巻	69
ページ	14-15
発行年	2014-09-30
URL	http://hdl.handle.net/10112/00023851

「牧村史陽氏旧蔵写真」の研究とデジタルアーカイブ化

内田吉哉

関西大学大阪都市遺産研究センターでは、大阪の郷土史家・牧村史陽氏が撮影した写真資料「牧村史陽氏旧蔵写真」を所蔵している。牧村史陽氏（1898～1979）は大阪船場の木綿問屋に生まれ、大阪大倉商業学校（現在の関西大倉高校）を卒業後、家業は他人にゆずって大阪郷土史の研究に没頭した。「牧村史陽氏旧蔵写真」は、その郷土史調査の際に撮影された写真資料である。写真資料は総数6444点、うち5923点は印画紙に現像された状態で保管されている。521点はガラス板に写真乳剤を塗布した、写真乾板の状態である。

大阪都市遺産研究センターでは、現在、「牧村史陽氏旧蔵写真」のデジタルアーカイブ化を進めている^(註1)。それと同時に、デジタルアーカイブ化による検索・閲覧の利便性向上にともなって、「牧村史陽氏旧蔵写真」自体の資料研究も進歩をとげている。

牧村史陽の研究活動の一つに、「佳陽会」での活動がある。「佳陽会」は大阪の郷土史研究会である。牧村史陽は、昭和27年（1952）に大阪市主催の成人学校の郷土史講座で講師をつとめた。講座終了後に、受講生から、このまま終わるのは惜しいとの声があり、それを受けて発足したのが佳陽会である。「佳陽会」の名前は、成人学校での講座が毎週火曜日であったことから、もじってつけたものであるという^(註2)。佳陽会は、その会報として『佳陽』を刊行していた。『佳陽』には、会での研究活動報告や、大阪郷土史に関する連載記事が掲載されている。『佳陽』に掲載された記事と写真図版を、デジタルアーカイブ化された「牧村史陽氏旧蔵写真」と比較検討することで、いくつかの新しい知見が得られた。

筋金入りのカメラマニアを自認していた牧村史陽であるが、『佳陽』に初めて牧村史陽撮影の写真図版が掲載されたのは、昭和44年（1969）2月に刊行された『佳陽』第14号である。佳陽会の発足から17年が経過していることと考え合

わせると、思いのほか新しいと言える。それまで『佳陽』に写真図版が掲載されなかった理由は、『佳陽』第14号の編集後記によると、主に経費の問題と、当時の編集作業において写真図版の挿入が現在ほど容易でなかったことにあるとされる。なお、佳陽会の発足が昭和27年、その後『佳陽』の刊行は途中で2度の断絶を挟んでおり、この第14号は「第3次」の『佳陽』のものである。

初めて掲載された写真図版は、「質問手帖」という記事に添えられたもので、大阪の橋に関する質問に牧村史陽が答える内容となっている（図1）。この記事で牧村史陽は、難波橋について書いており、その中で市電が堺筋を通ることになった経緯にふれている。市電についてのくだりに関連付けて、写真図版には「電車の通っていたころの難波橋」との説明がつけられている。『佳陽』の牧村史陽執筆記事では、この他にも同様に「過去の様子」として写真を紹介する例が見られ、牧村自身も自分の写真コレクションが、「大阪の都市景観の変遷」を記録した資料であると意識していたことがうかがえる。



図1 難波橋（昭和29年7月撮影）

なお『佳陽』第14号の「質問手帖」以降、牧村史陽は、『佳陽』に「あのはしこのはし」という、大阪の橋に関する連載を開始する。すると、毎号の連載に合わせるために、新たに写真を撮影する必要に迫られ、牧村史陽は、記事執



図2 梅之橋 (昭和44年10月撮影)

筆当時の「今の写真」を『佳陽』に掲載するようになる。

図2は、『佳陽』第21号(昭和44年11月刊行)の「あのはしこのはし」に掲載された写真である(図2)。記事は、大阪の橋のうち、最も小さい橋として高津宮(大阪府中央区高津)にかかる梅之橋を紹介する内容である。「牧村史陽氏旧蔵写真」では、この写真は昭和44年10月15日の撮影となっている。『佳陽』第21号の発行の1か月ほど前の日付で、つまりこの記事のために撮影した写真だと考えられる。記事の中で牧村は「この間久しぶりに写真をとりに出かけていたら、その池もカラカラに乾あがっていた」と記している。すなわちこの写真のことを指すものであろう。

『佳陽』の記事から、「牧村史陽氏旧蔵写真」に不足する情報を補うことができた事例もある。図3と図4は、写っている景観や印画紙の状態から、同時期に同じ場所で撮影された写真であると考えられる(図3)(図4)。このうち図3は、平成26年(2014)5月18日から23日にかけて、大阪都市遺産研究センターで開催された写真展「牧村史陽の写真でみる大阪」に出展されたものである。この写真は、撮影日時や場所についての情報が残されていない。そのため展示に際しては、写真の中に見られる建物から撮影場所を割り出し、画面を横切るスクーターの車種と年式から、おおよその撮影年代を推定して解説を書くことになった。ところが『佳陽』を調べると、図4は昭和45年(1970)10月刊行の第29号に掲載されていたことが判明する。牧村史陽の連載「あのはしこのはし」の、相合橋について書かれた記事に添えられたものであ



図3 相合橋① (昭和27年撮影)



図4 相合橋② (昭和27年撮影)

る。記事中で「写真は、昭和27年ごろの相合橋、南詰から北方を見る」と説明されている。

以上、郷土史研究会「佳陽会」の会報『佳陽』の調査を通じて、「牧村史陽氏旧蔵写真」について新しく知り得たことをいくつか紹介した。これまで「牧村史陽氏旧蔵写真」は、その資料点数の多さから、全ての写真を網羅的に調査することが難しかった。デジタルアーカイブ化の進展に伴って、求める情報に応じた写真を探し出すことが容易になり、こうした検証も可能になった。

註1 林 武文「牧村史陽氏旧蔵写真データベースの構築」
(林 武文・内田吉哉編著『「牧村史陽氏旧蔵写真」
目録』大阪都市遺産研究叢書 別集6、大阪都市遺産
研究センター、2014年)

註2 『佳陽』第1号、昭和42年9月